

—第 21 回 デジタルアーカイブ研究会—

日 時 2023 年 11 月 23 日（木・祝）13：30～15：45
開催方法 オンライン（Zoom を使用します）

コーディネーター：井上 透、林 知代

プログラム

※発表時間は 10 分、質疑応答は 5 分です。

《研究報告》

1. 寺院とアーカイブ事業

—『新編 成田山史』を素材として—

(13：30～13：45)

木村 涼（岐阜女子大学）

2. 郡上白山文化遺産デジタルアーカイブにおける地域資源の記録・管理法の研究

(13：45～14：00)

稲葉 詩織（株式会社 郡上リビングサービス）

3. 中山間集落の地域デジタルアーカイブに向けて

(14：00～14：15)

はば あやみ
幅 彩水（立命館大学 理工学部 環境都市工学科）

4. VUCA の時代を生き抜くために

～津留健二氏オーラルヒストリー～

(14：15～14：30)

つ は こ おとえ
津波古 吟枝（岐阜女子大学大学院 文化創造学研究科）

5. 図録「伝える災害の記憶」のデジタル展開

(14：30～14：45)

石井 啓二（一般財団法人 NHK 財団）

6. 木田宏資料メタバース博物館の展示における評価・改善

(14：45～15：00)

いちき
櫛 彩見（岐阜女子大学）

7. 個人・グループレベルで簡易にデジタルアーカイブを構築する方法の研究

—データ保存やメタデータ作成におけるウィキプロジェクトの利用— (15：00～15：15)

水谷 嘉宏（岐阜女子大学大学院 文化創造学研究科）

8. 企業アーカイブ構築について

(15：15～15：30)

山田 高久（株式会社 DNP コミュニケーションデザイン）

《現状報告》

1. デジタル情報空間の現在地とファクトチェック

(15：30～15：45)

宮本 聖二（立教大学大学院、日本ファクトチェックセンター）

デジタルアーカイブ研究会 研究会実施事務局（岐阜女子大学）

〒500-8813 岐阜市明德町 10 番地 岐阜女子大学文化情報研究センター内

電話：058-267-5301（日本デジタルアーキビスト資格認定機構）

第 21 回デジタルアーカイブ研究会 発表概要

＜研究報告＞

1.	寺院とアーカイブ事業 —『新編 成田山史』を素材として— (13:30～13:45) 木村 涼 (岐阜女子大学) 平成30年(2018)4月、成田山新勝寺は、成田山開基一〇八〇年を迎え、記念大開帳を開催し成田山の歴史を綴る『新編 成田山史』を刊行した。成田山ではこれまで、昭和の時代に2度にわたって『成田山史』を刊行している。今回の『新編 成田山史』は、成田山の体系的な歴史書としては、3冊目にあたる。本報告では、この『新編 成田山史』の内容に検討を加え、そこから成田山のアーカイブ事業を把握していく。
2.	郡上白山文化遺産デジタルアーカイブにおける地域資源の記録・管理法の研究 (13:45～14:00) 稲葉 詩織 (株式会社 郡上リビングサービス) 郡上白山文化遺産デジタルアーカイブでは、郡上白山文化遺産の世界遺産登録への整備と新たな観光資源の発掘を目的とし、建造物、建築物群を含めた伝統文化遺産の新たな観光資源の発掘、衰退する白山文化遺産の記録、白山文化遺産の県域(岐阜・石川・福井)を超えた白山文化遺産デジタルアーカイブの構築を進めている。 しかし従来の地域資源のデジタルアーカイブでは、記録した地点や時間が不明で、活用することが困難であった。そこで、記録や管理の方法について研究することにより、活用しやすい記録・管理の方法を開発する。
3.	中山間集落の地域デジタルアーカイブに向けて (14:00～14:15) はば あやみ 幅 彩水 (立命館大学 理工学部 環境都市工学科) 京都府宮津市日ヶ谷を対象に、地域づくりに利活用するための中山間地域の伝統生態知をまとめた、現在構築中のデジタルアーカイブについて報告する。20年間続く学生グループが現地に訪問して有機農業の米づくりなどの活動を発展させて、各種資料調査や住民ヒアリングを通して得られた、1960年までの集落内で食料・燃料を自給自足していた時代の知恵を、デジタルジオラマ、資源循環図、歳時暦で表現する。
4.	VUCAの時代を生き抜くために ～津留健二氏オーラルヒストリー～ (14:15～14:30) つ は こ おとえ 津波古 吟枝 (岐阜女子大学大学院 文化創造学研究科) VUCAの時代、困難で予測不可能といわれる時代を生き抜くため意識改革が求められている。 戦後78年。沖縄は戦争で甚大な人的・物的損害等の犠牲を払い、戦後はアメリカ占領下や日本復帰、基地問題等、まさに困難で予測不可能な時代を生き延び、現在に至る。このような先人たちの生き様は、活用可能な資料として後世に残したいと考える。沖縄で奄美の日本復帰と沖縄の復帰という「二つの復帰」を経験し、教職の道に生きる奄美出身の津留健二氏の語りから、戦前・戦後の奄美・沖縄・日本の特異性、戦後の教育・行政、敗戦の混乱から這い上がってきた人々の生き様のデジタルアーカイブ化を試みる。
5.	図録「伝える災害の記憶」のデジタル展開 (14:30～14:45) 石井 啓二 (一般財団法人 NHK 財団) 図録「伝える災害の記憶」には、あいおいニッセイ同和損害保険株式会社が所有する旧同和火災コレクション約1,400点の中から、古い時代の地震、津波、洪水等の自然災害、大火、疫病などの災害記録史料、約150点が掲載されている。これら史料を新たな防災・減災の取組みに活用することを目的にデジタル化し、オンライン上の防災デジタルミュージアムや8K技術を利用した高画質鑑賞システムへ展開したので報告する。

6.	木田宏資料メタバース博物館の展示における評価・改善 (14:45～15:00) いちき 櫟 彩見 (岐阜女子大学) メタバースの普及に伴い、メタバースを取り入れた展示を行う博物館が増加している。本学でもメタバース博物館を作成、公開しているが、資料の見やすさなど展示方法に課題がある。そこで博物館の展示という観点からアンケート調査により評価することで、メタバース空間における展示の留意点を明らかにした。その結果、アバターの目線によっては展示資料が見つらいものや、資料の操作が分からないものがあるということが分かった。また展示物の細かなところまでは見られないといったメタバース特有の欠点が明らかになり、アバターの目線や3Dモデルで表現できる範囲を考慮した展示にする必要があることが分かった。
7.	個人・グループレベルで簡易にデジタルアーカイブを構築する方法の研究 —データ保存やメタデータ作成におけるウィキプロジェクトの利用— (15:00～15:15) 水谷 嘉宏 (岐阜女子大学大学院 文化創造学研究科) 時代の移り変わりと共に変化する個人の生活や地域の文化・風景を当事者である個人や地域コミュニティ等のグループが記録・保存することは重要と考える。しかし、個人やグループは資金や専門知識が不足しており、簡易な方法でデジタルアーカイブを作成する必要があると考える。本発表では、身近な機器(スマホ・PC等)や無料のウィキプロジェクトを活用し簡易にデジタルアーカイブを構築する方法とその実践の一例を報告する。
8.	企業アーカイブ構築について (15:15～15:30) 山田 高久 (株式会社 DNP コミュニケーションデザイン) 企業が情報を発信するにあたって、発信の手段・メディアも多様化してきたため、その情報が社会で流通・利用される機会が多くなってきた。このことは、情報を発信する側の企業が、より情報源となる史資料の事実について責任を問われ、資料をどのように残していくかがより問われる時代になってきた。では企業はどういう組織と仕組みを構築すれば、この課題に対処できるのかを考察する。

※発表時間は10分、質疑応答は5分です。